

ノボシビルスク大学人文学部東洋学科等訪問報告書

2008/11/7

文責：高倉浩樹

1. 目的

訪問講座「日本・アジア」の実施に関わる東北大学東北アジア研究センターとノボシビルスク大学人文学部との間の協定文の調印および東北大学東北アジア研究センター・ロシア科学アカデミーシベリア支部共同ラボラトリー・セミナーの実施

2. 訪問先

ロシア・ノボシビルスク大学、ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所他

3. 訪問者

岡洋樹教授（副センター長）・高倉浩樹准教授（国際交流委員会訪問講座担当）

4. 日程と用務

日付	用務	主な面談相手
10月31日	岡教授移動 仙台ー北京	
11月1日	岡教授移動 北京ーノボシビルスク	E. ボイティシェク准教授（ノボシビルスク大学東洋学科長）
	アカデミゴロドク市観光	E. ボイティシェク准教授
11月2日	高倉准教授移動 ヤクーツクーノボシビルスク （ロシア連邦サハ共和国での学術調査後に合流）	E. ボイティシェク准教授
	ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所附属博物館見学	E. ボイティシェク准教授
11月3日	(1) 東北大学東北アジア研究センター・ロシア科学アカデミーシベリア支部共同ラボラトリー・セミナー 於：無機化学研究所講義室	F. クズネツォフ教授（共同ラボ・ロシア側責任者）ほか
	昼食会	F. クズネツォフ教授ほか
	(2) 「訪問講座日本・アジア」についての協定調印 於：ノボシビルスク大学国際交流課	人文学部長 P. パニン教授・外国語学部長・国際交流課長
	(3) ノボシビルスク大学東洋学科学生発表会①	E. ボイティシェク准教授ほか
	夕食会	ノボシビルスク大学副学長兼人文学部副学部長 A. プロドゥニコフ氏ほか
11月4日	(4) ノボシビルスク大学東洋学科学生発表会②	E. ボイティシェク准教授ほか
	(5) ノボシビルスク大学東洋学科教員との会談	S. コミサーロフ教授ほか
11月5日	移動 ノボシビルスクー北京	
11月6日	移動 北京ー仙台	

以下、上記について補足的に説明する。

11月3日の昼食会が行われたシベリア支部学会館
の前の E. ボイティシェク准教授



(1) 共同ラボセミナーについて

共同ラボ・ノボシビルスク分室が開設して以来、今回が、初の公式訪問団であった。共同ラボセミナーは以下の番組でロシア語および英語で行われた。



- ① 東北大学とロシア科学アカデミーシベリア支部交流の歴史（クズネツォフ教授）
- ② 訪問講座「日本とアジア」について（ボイティシェク准教授）
- ③ 東北大学東北アジア研究センター紹介（岡教授）
- ④ 学術報告「日本における内陸アジア史研究の展開」（岡教授）
- ⑤ 学術報告「極北牧畜民サハにおける賢い狩人としての父親像」（高倉准教授）

参加者はおおよそ 40 人ほど。シベリア支部歴史研究所や考古学民族学研究所の研究者からの参加者の他、ノボシビルスク大学東洋学科日本語コースの学生、および東北アジア研菊地教授・鹿野准教授と共同研究を実施している動物生態システム研究所のユルロワ夫妻、さらに関係する研究者が参加した。なお、岡教授の発表は歴史研究所の副所長の申し出により出版されることとなった。



今回の共同ラボ・セミナーは、ロシア国内が休日だったにもかかわらず多くの参加者を得て、質疑応答を含めて充実した研究会となった。このようなセミナーは、ノボシビルスク側と東北大学の研究交流を推進する場として効果的であると実感した。

(2) 「訪問講座日本・アジア」についての協定調印

協定は、国際交流課において、人文学学部長および外国語学部長、および国際交流課長の E. サガイダク氏、E. ボイティシェク准教授の参加のもとに調印が行われた。

直接の調印者は人文学部長パーニン教授であるが、協定書における関係機関として明記されている外国語学部長も同席し、今後の訪問講座実施における協力を確認した。



(3) (4) ノボシビルスク大学東洋学科学学生発表会

一日目は大学 5 年生の卒業研究についての概要（4 人）、二日目は大学 2-4 年生による自己紹介（15 人）と日本の富山大学からの留学から帰国したばかりの大学 5 年生による研究発表が行われた。学生の日本語による発表を聞きながら、適宜質疑応答を行った。

学生の関心領域は、日本の近代文学・宗教・思想・歴史・風俗・言語学が主流であるが、法律や社会問題（高齢化社会・青年問題）も関心が広がっている。また、いずれの学生も漫画やアニメを含む日本のサブカルチャーには強い関心をもっていた。富山大学の留学から帰国したばかりの学生の発表は、在日ムスリムの社会的ネットワークおよびコミュニティ形成についての人類学的研究であり、学部生の研究発表としてはきわめて高いレベルに

あった。

学生の中には発表していないものもいるので、学生全体のレベルがどのようなものであるのか十分に把握できたわけではないが、これらの発表会を通して、ノボシビルスク大の東洋学科日本語コースの学生のレベルは非常に高く、日本語で授業しても問題ないと判断した。



(5) ノボシビルスク大学東洋学科教員との会談

E. ボイティシエック准教授、コミサーロフ教授（中国考古学・古代史）および中国史の教授などと訪問講座の実施に関わる諸問題について意見交換した。

その結果、歴史分野については①仏教美術史、②日本および東アジアの旧石器時代、③日本の古代中世史、④19世紀東アジア史におけるモンゴル・中国・日本関係、⑤日本近世風俗史、⑥日本と中国の近代史について強い関心が示された。文化分野については⑦日本の神話、⑧日本と中国の比較民族学、社会分野については⑨日本の少数民族問題、⑩日本における歴史教育の諸問題、自然科学・技術分野については、日本の地質学などについての講義を実施して欲しいとの要望が出た。一応の予定としては、来年の2009度は歴史分野、2010年度は文化分野・・・という予定なので、特に歴史分野について具体的な要望がでたことになる。さらに、コミサーロフ教授は、特に日本における中国考古学（古代史）についての講義（講演）についての要望が出された。

センター側からは、この講義内容はあくまで予定であって、実施可能であるかどうか確定されたものではないことが説明され、両者によって確認された。特に訪問講座は東北大学の授業期間であること、またセンターの教員のみによって講義が行われるわけでないため講師の確定は現時点ではできないことが説明された。また実際の講義についても4つの分野については年に当該分野ごとに限定して実施するというものではなく、あくまでも緩やかな枠組みであることが説明された。

東洋学科からは、講師と授業科目が確定したら授業内容についての要旨を事前に送って欲しいと要望がでた。これは、事前にロシア語への翻訳も含めて学生等に周知し、学生のほうでも準備しておくためだという。

訪問講座の番組においては講義だけでなく、学生の発表も組み合わせると好ましいという意見を東洋学科側は持っていた。これをふまえて、センター側からは講義の内容に関わる学生のグループ発表をしてもらえばいいのではないかと提案した。

最終的な番組については今後1年間かけて電子メールで検討していくことが確認された。

このことは、東洋学科には伝えていないが、授業の様子を録音し、テープ起こしたものをテキスト化・簡易印刷して学科に配布するということが検討されてもいいと岡教授と高倉准教授の間で話し合いがされた。



(6) その他

- ・ 夕食会を主催した副学長および副学部長ブロドニコフ氏は17世紀東シベリア史を専門とする歴史家であった。今回の訪問者である岡教授および高倉准教授の専門とも部分的に重複していることもあり、夕食会は熱のこもった議論も含めて大変和やかに実施された。何らかの形でシンポジウム・ワークショップなどを今後実施していこう希望が相互に確認された。
- ・ 岡教授からは、東北アジアフォーラムを実施し、仙台・ノボシビルスク・ヤクーツク・ウランウデ・ウランバートル・フフホトを結ぶセミナーなどの実施の可能性について検討すべきとの意見があった。



5. まとめ

- (1) 今回の訪問の主要な目的である訪問講座実施のためのノボシビルスク大学人文学部との協定書は無事調印された。
- (2) 上記講座は、ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族学研究所などの組織の協力の下に実施されるが、それは本事業が東北大学東北アジア研究センターとロシア科学アカデミーシベリア支部との間に設置された共同ラボラトリーの共同事業だからである。
- (3) 共同ラボラトリーノボシビルスク分室開設以降、最初の公式訪問団であり、ロシア科学アカデミー正会員のクズネツォフ教授によって、セミナーが主宰された。そこでは東北大学とロシア科学アカデミーシベリア支部の間の共同関係についての歴史的由来についての報告の他、訪問した岡教授および高倉准教授によって、東北アジア研究センターの紹介および両研究者の個人研究についての報告が行われた。
- (4) 訪問講座の主たる聴講者となるノボシビルスク大学人文学部東洋学科の学生の日本語レベルは、訪問講座を理解することが十分にできる高い日本語力をもっていることが確認された。
- (5) 訪問プログラムで面談したノボシビルスク大学およびロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所および考古学民族学研究所の研究者と、シンポジウムや会議などの形での研究交流の実現を目指して双方が努力することが確認された。
- (6) 来年度以降、日本から派遣団の責任者は岡教授ないし高倉准教授がその任を負う。
- (7) 今回の訪問の実現および滞在中においては、様々な関係者からとりわけ上記の番組表にあげた研究者が多大な支援を受けた。なかでも、ノボシビルスク大学エレナ・ボイティシェク東洋学科長の協力は重要であった。彼女なしでは、今回の訪問は成功しなかったとさえいえる。彼女は、2007年度において東北アジア研究センター客員教授として来日している。そのときに仙台で知り合った東北大学関係者との友好が、今回の訪問の成功を支えたといえる。



11月3日の夕食会で出されたアルメニア料理の羊肉（美味！）